

## 1 はじめに

年報あいさつ

園木 孝志

平成28年4月に弘井孝幸君と堀善和君が入局し蒸野寿紀助教が復帰した。7月に紀南病院から田村志宣准教授を迎え海南医療センターから細井裕樹助教が復帰した。11月に栗山幸大学内助教が腫瘍センターの助教になった。一方、7月に村田祥吾助教が阪大免疫フロンティア木下研へ、小畑裕史学内助教が海南医療センターへ、それぞれ出向した。西川彰則助教は医局長(10月まで)と病棟長を兼務し病院の新規電子カルテシステム導入に主導的な働きをした。大岩健洋学内助教と山下友佑学内助教は診療を支えている。

診療では、「幅広く血液疾患を診療する科」と「造血幹細胞移植の拠点」を目指したい。患者さんを断らず幅広く診療することは、新たな事実気づく機会になる。当科の前身は「輸血・血液疾患治療部」で県民の移植医療への期待がこめられており、「造血幹細胞移植」は当科のレゾンデートルの1つである。本年度から院内移植コーディネーターとして上田かやさんが活躍している。平成29年2月初めから4月末まで準無菌病棟の工事が行われ患者さんに不便をかけているが、新しい病棟で移植成績をさらに向上させたい。移植件数の増加や新薬の登場とともに入院患者さんが増え、11東病棟に病床を頂くなどして29床に増床してもらっている。それでも100%越えの病床稼働率が常態化している。患者さんの利便性を考慮し、地域の血液診療体制の確立が大切な課題である。

研究では、移植後後期に肝線維化と腹水を生じる症候群、EBVの未熟T細胞への浸入門戸、原発性形質性白血病への同種造血幹細胞移植例を英文誌に掲載した。現在、診療で見つけたゲノム異常の病的意義を細胞株や遺伝子改変マウスを用いて解析している。今後「ベンチからベッドサイドへの研究」や「医師主導臨床研究」にも挑戦したい。

教育では、当科は「ベストクリニカルティーチング賞」を受賞した。初期研修医の赤木佑衣奈さんは近畿血液学会初期研修医優秀演題賞を、栗山幸大助教は日本リンパ網内系学会総会奨励賞を、各々受賞した。当科の卒前・卒後教育が評価されたと思っている。今年度ローテートしてくれた初期研修医は、田中将規君・西伸幸君・安武正治郎君・山田万里央君・赤木佑衣奈さん・小浴秀樹君・芝田あゆみさん・田中顕君・平山純也君・児玉卓也君・栩野祐一君・春谷勇平君・中村美紗生さん・中西靖佳さん・藪内俊宣君である。当科での診療経験を生かして成長してもらいたい。

今後も一步一步教室を前に進め、医学・医療に貢献したい。1人でできることは限られており、教室内外のご支援が頼りである。教室の皆さん、5西病棟と外来を支えている和田記代子師長・スタッフの皆さん、輸血業務を支えている松浪美佐子主任・輸血部スタッフ、医局秘書の花井宏実さん・矢田尚子さんに感謝している。

平成29年3月吉日

## 2 教室現況

### (1) 教室員

#### 医局

|         |        |                      |
|---------|--------|----------------------|
| 教授      | 園木 孝志  |                      |
| 准教授     | 田村 志宣  |                      |
| 助教      | 西川 彰則  |                      |
| 助教      | 細井 裕樹  |                      |
| 助教      | 蒸野 寿紀  |                      |
| 助教      | 村田 祥吾  |                      |
| 助教      | 栗山 幸大  |                      |
| 学内助教    | 山下 友佑  | (大学院生)               |
| 学内助教    | 大岩 健洋  |                      |
| 学内助教    | 弘井 孝幸  |                      |
| 学内助教    | 堀 善和   |                      |
| 非常勤講師   | 花岡 伸佳  |                      |
| 非常勤講師   | 綿貫 樹里  |                      |
| 研修医     | 田中 将規  | (2016. 4月1日～6月30日)   |
|         | 西 伸幸   | (2016. 4月1日～6月30日)   |
|         | 安武 正治郎 | (2016. 4月1日～6月30日)   |
|         | 山田 万里央 | (2016. 4月1日～6月30日)   |
|         | 小浴 秀樹  | (2016. 7月1日～9月30日)   |
|         | 芝田 あゆみ | (2016. 7月1日～9月30日)   |
|         | 赤木 佑衣奈 | (2016. 7月1日～10月31日)  |
|         | 田中 顕   | (2016. 9月1日～10月31日)  |
|         | 児玉 卓也  | (2016. 10月1日～10月31日) |
|         | 平山 純也  | (2016. 10月1日～10月31日) |
|         | 栩野 祐一  | (2016. 12月1日～12月31日) |
|         | 中村 美紗生 | (2017. 1月1日～2月28日)   |
|         | 春谷 勇平  | (2017. 1月1日～3月31日)   |
|         | 藪内 俊宣  | (2017. 2月1日～2月28日)   |
|         | 中西 靖佳  | (2017. 2月1日～3月31日)   |
| 事業担当補助員 | 花井 宏実  |                      |
| 秘書      | 矢田 尚子  |                      |

#### 輸血部

|      |        |
|------|--------|
| 主任   | 松浪 美佐子 |
| 主査   | 堀端 容子  |
| 主査   | 中島 志保  |
| 副主査  | 富坂 竜矢  |
| 医療技師 | 井本 翔平  |

## (2) 人事異動

|      |    |    |                     |
|------|----|----|---------------------|
| 准教授  | 採用 | 田村 | 志宣 (2016.7 月 1 日～)  |
| 助教   | 採用 | 細井 | 裕樹 (2016.7 月 1 日～)  |
| 学内助教 | 採用 | 弘井 | 孝幸 (2016.4 月 1 日～)  |
| 学内助教 | 採用 | 堀  | 善和 (2016.4 月 1 日～)  |
| 学内助教 | 退職 | 小畑 | 裕史 (～2016.6 月 30 日) |
| 助教   | 退職 | 栗山 | 幸大 (～2017.3 月 31 日) |

# 臨床実習

平成 28 年 4 月～

| 血液内科  |   |                                 |                     |                                 |      |  |    |   |                                     |
|---|---|---------------------------------|---------------------|---------------------------------|------|--|----|---|-------------------------------------|
| 集合場所：研究棟 10 階 血液内科医局（内線 5453）   |   |                                 |                     |                                 |      |  |    |   |                                     |
| 総括の後、レポートを訂正し、血液内科医局の秘書机に一部提出すること。<br>(訂正したレポートを提出しない場合、実習を履修しなかったと判断する。) |   |                                 |                     |                                 |      |  |    |   |                                     |
| ☆コピーは病棟で行わず医局で行うこと☆   |   |                                 |                     |                                 |      |  |    |   |                                     |
| 日付  | 8   | 9                               | 10:30               | 12:30                           | 13   | 14   | 15 | 16  | 17～                                 |
| /   |   | 第 1 週目<br>実習の<br>楽しみ方<br>(園木教授) | 症例学習                |                                 |      |  |    | 16:30-<br>レポ-ト<br>テーマ<br>発表   | 17:00-<br>19:30<br>チャ-ト<br>カンファ-レンス |
| (/)   |   | 第 2 週目<br>レポ-ト進捗状況<br>報告(園木教授)  |                     |                                 |      |  |    | 医局  | 5 西 CR                              |
| /   |   | 8:30-9:30<br>入院患者廻診<br>(園木教授)   | 回診後<br>外来<br>(園木教授) | 12:30-<br>薬の第 1 週目<br>説明会<br>医局 | 症例学習 | 第 1 週目<br>症例学習                                       |    | 症例学習※   |                                     |
| (/)   |   |                                 |                     |                                 |      | 第 2 週目<br>14:00-15:00<br>造血幹細胞移植<br>(細井助教)<br>5 西 CR |    |   |                                     |
| /   |   |                                 | 症例学習                |                                 | 症例学習 | 第 1 週目<br>14:00-15:00<br>輸血部実習<br>(松浪主任)             |    | 症例学習※   |                                     |
| (/)   |   |                                 |                     |                                 |      | 第 2 週目<br>症例学習                                       |    |   |                                     |
| /   | 第 2 週目<br>8:00-<br>8:30<br>カンファ-レンス<br>(CC/<br>MGH) | 第 1 週目<br>外来・内科診察<br>(園木教授)     | 症例学習                |                                 | 症例学習 | 第 2 週目<br>14:00-15:00<br>血球形態を学ぶ<br>(西川助教)<br>5 西 CR |    | 第 1 週目<br>症例学習  |                                     |
| (/)   |   |                                 |                     |                                 |      | 第 2 週目<br>症例学習                                       |    | 第 2 週目 16:00-<br>HIV 感染症を把える<br>(園木教授)<br>5 西 CR                                    |                                     |
| /   |   | 症例学習                            |                     |                                 | 症例学習 | 第 1 週目<br>15:00-<br>HIV カンファ-<br>外来                  |    | 第 1 週目<br>症例学習※   |                                     |
| (/)   |   |                                 |                     |                                 |      |  |    | 第 2 週目 16:00-<br>レポ-ト発表会/レポ-ト提出(園<br>木教授)5 西 CR<br>※レポ-トは 2 部、スライド資<br>料は全員分と教官用を準備 |                                     |

教官から指摘を受けた個  
所を訂正し、必ず**本日中**  
に提出すること(代表者 1  
名が取りまとめ提出)

※随時、疾患について討論を行う(園木)

### 3 主な活動内容

#### (1) 学会および研究会

##### 1) 全国学会

佐野尚平、嶋本めぐみ、西村知恭、岩城久弥、花岡伸佳：「幹細胞移植に伴う口腔粘膜炎に対する半夏瀉心湯の有効性と好中球への影響」、第 25 回日本医療薬学会年会、2015.11.21-23 神奈川（年報 No.13 の記載漏れ）

箕浦直人、原 嘉秀、中村好伸、大石博晃、花岡伸佳、赤水尚史：「血液内科領域における TARC の有用性」、第 47 回日本臨床検査自動化学会、2015.10.8-10 神奈川（年報 No.13 の記載漏れ）

細井裕樹、栗山幸大、大岩健洋、小畑裕史、山下友佑、蒸野寿紀、村田祥吾、西川彰則、園木孝志：「染色体転座機序からみたダブルヒットリンパ腫（DHL）の進展」、第 56 回日本リンパ網内系学会総会、2016.9.1-3 熊本

栗山幸大、綿貫樹里、細井裕樹、大岩健洋、小畑裕史、山下友佑、蒸野寿紀、村田祥吾、西川彰則、鈴木律朗、榎本 豊、北村俊雄、園木孝志：「ヒト B 細胞性リンパ腫の染色体転座切断点に同定した miR142 の機能解析」、第 56 回日本リンパ網内系学会総会、2016.9.1-3 熊本

大岩健洋、西川彰則、栗山幸大、小畑裕史、村田祥吾、山下友佑、園木孝志：「腸管気腫症と門脈ガス血症に加えて腎梗塞を合併した AL アミロイドーシスの 1 例」、第 78 回日本血液学会学術集会、2016.10.13-15 横浜

小畑裕史、西川彰則、大岩健洋、山下友佑、栗山幸大、蒸野寿紀、村田祥吾、田村志宣、園木孝志：「臍帯血移植後の多剤耐性緑膿菌敗血症に対し顆粒球輸注および BC 法による抗菌薬治療が奏功した AML の一例」、第 78 回日本血液学会学術集会、2016.10.13-15 横浜

Hiroki Hosoi, Yohei Kida, Yasuaki Toyoda, Hiroko Nakanishi, Yasushi Nakamura, Masayuki Nishino Akira Hibino, Akinori Nishikawa, Yoichi Yamada, Takashi Sonoki :Two elderly AML patients treated with GO: relationship between CD33 expression and response. 第 78 回日本血液学会学術集会、2016.10.13-15 横浜

長井善隆、田村志宣、阪口臨、栗原稔男、岡本幸春、蒸野寿紀、西川彰則、直川匡晴、園木孝志 和歌山県下で本態性血小板増多症に対しアナグレライドを投与した 38 症例の後方視的検討 第 78 回日本血液学会学術集会 2016.10.14 横浜

細井裕樹、西川滋子：「化学療法中の血液疾患患者での疥癬に対する易感染性」、第 32 回日本環境感染学会・学術研究会総会、2017.2.24-25 神戸

堀 善和、西川彰則、弘井孝幸、山下友佑、大岩健洋、小畑裕史、栗山幸大、細井裕樹、蒸野寿紀、田村志宣、園木孝志：「多発性骨髄腫自家移植後再発に対し救援化学療法として再度自家移植を行った 7 症例の後方視的検討」、第 39 回日本造血細胞移植学会総会、2017.3.2-4 島根

細井裕樹、村田祥吾、西川彰則、栗山幸大、堀 善和、弘井孝幸、大岩健洋、小畑裕史、山下友佑、蒸野寿紀、田村志宣、園木孝志：「Hetero-to-Homo 移植に標準 GVHD 予防法を用いた HLA ホモハプロタイプ患者の 2 例」、第 39 回日本造血細胞移植学会総会、2017.3.2-4 島根

## 2) 地方学会

赤木佑衣奈、田村志宣、堀 善和、大岩健洋、山下友佑、栗山幸大、蒸野寿紀、細井裕樹、西川彰則、園木孝志：「成人 T 細胞白血病・リンパ腫を若年発症した Down 症候群の一例」、第 106 回近畿血液学地方会、2016.10.29 大阪

小浴秀樹、田村志宣、芝田あゆみ、山下友佑、大岩健洋、蒸野寿紀、細井裕樹、西川彰則、園木孝志：「原発性肺線癌の化学療法中に発症した治療関連急性前骨髄球性白血病の一例」、第 106 回近畿血液学地方会、2016.10.29 大阪

蒸野寿紀、堀善和、大岩健洋、山下友佑、栗山幸大、細井裕樹、中島志保、堀端容子、松浪美佐子、西川彰則、田村志宣、園木孝志：「血小板輸血により2度のアナフィラキシーショックを来した同種移植例」、第60回日本輸血・細胞治療学会近畿支部総会、2016.11.26 大阪

## 3) その他（研究会等）

田村志宣：「初発移植適応多発性骨髄腫の治療」、Wakayama Myeloma Forum、アバローム紀の国、2016.4.8 和歌山

棚野祐一、山下友佑、栗山幸大、村田祥吾、西川彰則、園木孝志、辻岡洋人、折居 誠、穂積健之、赤阪隆史：「心臓に浸潤を来したびまん性大細胞型 B 細胞性リンパ腫の一例」、第 84 回和歌山医学会総会、和歌山県 JA ビル、2016.7.3 和歌山

小畑裕史：「寛解導入療法中に播種性糸状菌症を呈した急性骨髄性白血病の一例」、重症感染症セミナー、和歌山県立医科大学、2016.7.8 和歌山

田村志宣：「悪性リンパ腫治療における G-CSF 適正使用～自験例を踏まえて～」、和歌山血液学セミナー、和歌山県立医科大学臨床講堂Ⅱ、2016.7.22 和歌山

大岩健洋：「ルキソリチニブを長期投与した二次性骨髄線維症の一例」、和歌山 MPN セミナー、和歌山県立医科大学高度医療人育成センター中研修室 2016.8.5 和歌山

田村志宣、益満 茜、是枝大輔、中谷泰樹、山野貴司、山口智由、瀬田剛史、浦井俊二、浜崎俊明：「和歌山県における JMECC (Japanese Medical Emergency Care Course、内科救急・ICLS 講習会) の取り組み」第 17 回和歌山救急・災害医療研究会、粉河ふるさとセンター、2016.9.24 和歌山

蒸野寿紀：「エクリズマブを使用した C5 遺伝子変異陽性 PNH 患者の臨床経過」、第 25 回奈良医大輸血・血栓セミナー、奈良県立医科大学輸血部、2016.9.28 奈良

堀 善和：「重篤な皮疹により治療継続困難となった難治性骨髄腫の 2 例」、第 2 回紀州血液/腫瘍/免疫研究会、ホテルグランヴィア和歌山、2016.11.12 和歌山

田村志宣：「知っておきたい輸血療法の副作用と対策」、血液製剤使用適正化推進講演会、和歌山県勤労福祉会館プラザホープ、2016.11.13 和歌山

園木孝志：「HIV 感染者の診療について」、平成 28 年度エイズ対策研修会、和歌山県立医科大学臨床講堂Ⅱ、2016.11.16 和歌山

田村志宣：「骨髄腫の治療“すぐそこ”」、日本骨髄腫患者の会、和歌山商工会議所、2016.11.19 和歌山

西川彰則：「骨髓腫の治療」、日本骨髓腫患者の会、和歌山商工会議所、2016.11.19 和歌山

細井裕樹：「骨髓腫の合併症の治療」、日本骨髓腫患者の会、和歌山商工会議所、2016.11.19 和歌山

田村志宣：「がん化学療法における抗真菌薬の適正使用 ～ Antifungal Stewardship Program During Chemotherapy ～」、和歌山県病院薬剤師会研修会、2016.11.24 和歌山

栗山幸大：「高齢者びまん性大細胞型 B 細胞性リンパ腫に対する減量 R+THP-COP 療法」、第 44 回和歌山悪性腫瘍研究会、和歌山県立医科大学高度医療人育成センター、2016.12.17 和歌山

井本翔平：「当院の自己血輸血の現状」、和歌山自己血輸血セミナー、和歌山県立医科大学高度医療人育成センター、2016.12.20 和歌山

山下友佑、田村志宣、岩橋吉史、佐々木泉、西川彰則、金澤伸雄、邊見弘明、村田晋一、改正恒康、大島孝一、今留謙一、吉浦孝一郎、園木孝志：「治療抵抗性 EB ウイルス関連血球貪食性リンパ組織球症を発症した X 連鎖性知的障害例における新規 *CCDC22* 遺伝子変異の同定」 第 10 回日本免疫不全症研究会、2017.1.21 東京

細井裕樹：「初発時縦隔と再発時リンパ節で異なる表現型を示した EBV 関連 T 細胞性リンパ系腫瘍の一例」、第 2 回血液・腫瘍塾、和歌山県立医科大学 2017.1.27 和歌山

西川彰則：「移植後生活について」、平成 28 年度和歌山県骨髓移植対策懇話会、和歌山県民文化会館 2017.2.23 和歌山

## (2) 学術論文

### 1) 和文原著

富坂竜矢、花岡伸佳、峯 梓、中島志保、堀端容子、松浪美佐子、中村好伸、大石博晃、園木孝志：「大量ステロイド療法と血小板輸血が奏功した重症出血を伴う後天性第 V 因子インヒビター」日本輸血細胞治療学会誌、61：539-545、2015（年報 No.13 の記載漏れ）

小山明日美、塩谷千恵子、栗原稔男、蒸野寿紀、岡本幸春、玉置達紀、尾崎敬、大島孝一、田村志宣 原因不明の貧血として 10 年間経過観察したのち 診断し得た脾臓辺縁帯リンパ腫. 臨床血液 2017 58(1)；9-14

### 2) 英文原著

Jing Xuefeng, Takashi Sonoki, Masayasu Miyajima, Takahiro Sawada, Naoko Terada, Shigeki Takemura, & Kazushige Sakaguchi : EphA4-deleted microenvironment regulates cancer development and leukemoid reaction of the isografted 4T1 murine breast cancer via reduction of an IGF1 signal  
Cancer Medicine 2016 5(6)1214-1227（年報 No.13 の記載漏れ）

Hiroto Minamino, Hidefumi Inaba, Hiroyuki Ariyasu, Hiroto Furuta, Masahiro Nishi, Takashi Yoshimasu, Akinori Nishikawa, Masanori Nakanishi, Shigeki Tsuchihashi, Fumiyoshi Kojima, Shin-ichi Murata, Gen Inoue, and Takashi Akamizu: A novel immunopathological association of igG4-RD and vasculitis with Hashimoto's thyroiditis. Endocrinology, Diabetes & Metabolism Case Report online 2016 Feb 19

Nobuyoshi Hanaoka, Toshiki Mushino, Shogo Murata, Shoichi Nagakura, Kentaro Horikawa, Tatsuya Kawaguchi, Takashi Sonoki, and Hideki Nakakuma: Racial Difference in Paroxysmal Nocturnal Hemoglobinuria Thrombosis and Glycosylphosphatidylinositol-Deficient Granulocytes  
*Journal of Hematology Thrombosis* 2016 (2):2

Masamitsu Yanada, Shingo Yano, Heiwa Kanamori, Moritaka Gotoh, Nobuhiko Emi, Kyoko Watanabe, Mineo Kurokawa, Akinori Nishikawa, Takehiko Mori, Naoto Tomita, Makoto Murata, Hisako Hashimoto, Hideho Henzan, Yoshinobu Kanda, Masashi Sawa, Akio Kohno, Yoshiko Atsuta, Tatsuo Ichinohe, Akiyoshi Takami:  
Autologous hematopoietic cell transplantation for acute promyelocytic leukemia in second complete remission: outcomes before and after the introduction of arsenic trioxide. *Leukemia & Lymphoma* 2016 Oct (5):1-7

Hosoi H, Imadome KI, Tamura S, Kuriyama K, Murata S, Yamashita Y, Mushino T, Oiwa T, Kobata H, Nishikawa A, Nakakuma H, Hanaoka N, Isobe Y, Ohshima K, Sonoki T. An Epstein-Barr virus susceptible immature T-cell line, WILL4, established from a patient with T-lymphoblastic lymphoma bearing CD21 and a clonal EBV genome. *Leuk Res.* 2017 Jan 15;55:1-5. doi: 10.1016/j.leukres.2017.01.022. [Epub ahead of print]

Toshiki Mushino, Nobuyoshi Hanaoka, Shogo Murata, Kodai Kuriyama, Hiroki Hosoi, Akinori Nishikawa, Shinobu Tamura, Hideki Nakakuma, and Takashi Sonoki: An optimal approach for fluoroquinolone garenoxacin prophylaxis in patients with hematological malignancies and chemotherapy-induced neutropenia  
*Journal of Blood & Lymph* in press

### 3) 症例報告

Hanaoka N, Murata S, Hosoi H, Shimokado A, Mushino T, Kuriyama K, Hatanaka K, Nishikawa A, Kurimoto M, Sonoki T, Muragaki Y, and Nakakuma H: B-cell-rich- T-cell lymphoma associated with Epstein-Barr virus-reactivation and T-cell suppression following anti-thymocyte globulin therapy in a patient with severe aplastic anemia. *Hematology Reports.* 7:5906,2015 (年報 No.13 の記載漏れ)

Hosoi H, Sonoki T, Murata S, Mushino T, Kuriyama K, Nishikawa A, Hanaoka N, Ohshima K, Imadome K, Nakakuma H: Successful Immunosuppressive Therapy for Severe Infections Mononucleosis in a Patient with Clonal Proliferation of EBV-infected CD8-positive Cells. *Intern Med.* 2015; 54(12):1537-41.doi:10.2169/internal medicine. 54.3201. Epub 2015 Jun 15 (年報 No.13 の記載漏れ)

Hosoi H, Warigaya K, Murata S, Mushino T, Kuriyama K, Nishikawa A, Tamura S, Hatanaka K, Hanaoka N, Muragaki Y, Murata S, Nakakuma H, Sonoki T. Refractory Ascites with Liver Fibrosis Developed in Late Phase Allogeneic Hematopoietic Stem Cell Transplantation: Report of Three Patients. *Hematol Rep.* 2016 Jun 27;8(2):6482.

Kawamoto K, Miyoshi H, Yanagida E, Yoshida N, Kiyasu J, Kozai Y, Morikita T, Kato T, Suzushima H, Tamura S, Muta T, Kato K, Eto T, Seki R, Nagafuji K, Sone H, Takizawa J, Seto M, Ohshima K. Comparison of clinicopathological characteristics between T-cell prolymphocytic leukemia and peripheral T-cell lymphoma, not otherwise specified. *Eur J Haematol.* 2017 Jan 27. doi: 10.1111/ejh.12856.

Yamashita Y, Tamura S, Oiwa T, Kobata H, Kuriyama K, Mushino T, Murata S, Hosoi H, Nishikawa A, Hanaoka N, Sonoki T. Successful Intrathecal Chemotherapy Combined with Radiotherapy Followed by Pomalidomide and Low-Dose Dexamethasone Maintenance Therapy for a Primary Plasma Cell Leukemia Patient. *Hematol Rep.* 2017 Feb 23;9(1):6986



### (3) 著書(単行本、シリーズもの含む)

花岡伸佳、中熊秀喜：再生不良性貧血。「難病辞典」(編集 尾崎承一)、学研メディカル秀潤社、東京、pp278-284、2015 (年報 No.13 の記載漏れ)

蒸野寿紀：編集 公益社団法人 地域医療振興協会「今こそ、地域医療！」メディカルサイエンス社、p67-p75、2016.6

園木孝志：「多発性骨髄腫学」日本臨床 74 巻 増大号 5, p546-p550, 2016.7.20

田村志宣. “肺がん：検査時の注意点と分子標的薬による有害事象” Hospitalist (メディカル・サイエンス・インターナショナル) 2016.11

### (4) その他の印刷物(研究成果報告集、学会抄録集、寄稿文など)

該当なし。

### (5) 研究費、助成金

花岡伸佳：平成28年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(代表)、特発性造血障害におけるNKG2Dリガンド発現の臨床的意義の確立

花岡伸佳：平成28年度厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の用化研究事業(再生医療関係研究分野))(分担)、iPS細胞を活用した血液・免疫系難病に対する革新的治療薬の開発

園木孝志：厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業、HIV感染症の医療体制の整備に関する研究

### (6) 支援研究会など

**Wakayama Myeloma Forum** (セルジーン株式会社主催)：血液疾患治療における免疫反応の重要性、**西川博嘉** (名古屋大学大学院医学系研究科 微生物・免疫学講座 分子細胞免疫学分野 教授、国立がん研究センター研究所 腫瘍免疫学担当/先端医療開発センター免疫TR分野長)、アバローム紀の国、2016.4.8 和歌山

**第1回紀州血液/腫瘍/免疫研究会** (ブリストル・マイヤーズ株式会社主催)：T細胞の発生と再生-T細胞分化過程の解明と再生T細胞を用いた免疫細胞療法の開発-、**河本 宏** (京都大学 再生医科学研究所 再生免疫学分野 教授)、ホテルグランヴィア和歌山、2016.5.14 和歌山

**第1回紀州血液/腫瘍/免疫研究会** (ブリストル・マイヤーズ株式会社主催)：フィラデルフィア染色体陽性急性リンパ性白血病の最新の治療戦略、**中世古 知昭** (千葉大学医学部付属病院 血液内科 診療教授)、ホテルグランヴィア和歌山、2016.5.14、和歌山

**血液・腫瘍塾** (中外製薬株式会社主催)：分子標的治療薬の注意点と今後の展望、**畠 清彦** (がん研究会 有明病院 血液腫瘍科 部長)、和歌山県立医科大学臨床講堂I、2016.5.26 和歌山

**重症感染症セミナー** (大日本住友製薬株式会社主催)：血液疾患患者における真菌感染症～臨床と基礎の連携 虎の門病院での経験から～、**荒岡 秀樹** (虎の門病院 臨床感染症科)、和歌山県立医科大学臨床講堂II、2016.7.8 和歌山

**和歌山血液学セミナー**（協和発酵キリン株式会社主催）：エピジェネティクス異常と造血器腫瘍、**北村 俊雄**（東京大学医科学研究所 先端医療研究センター細胞療法分野 教授）、和歌山県立医科大学臨床講堂Ⅱ 2016.7.22 和歌山

**和歌山 MPN セミナー**（ノバルティスファーマ株式会社主催）：MPN 治療のこれから 2016、**桐戸 敬太**（山梨大学医学部 血液・腫瘍内科 教授）、和歌山県立医科大学高度医療人育成センター中研修室 2016.8.5 和歌山

**第 6 回紀州血液塾**（中外製薬株式会社主催）：T 細胞リンパ腫における RHOA 変異、**坂田 麻美**（筑波大学医学医療系 血液内科 准教授）、ダイワロイネットホテル和歌山、2016.10.28 和歌山

**第 2 回紀州血液/腫瘍/免疫研究会**（ブリストル・マイヤーズ株式会社主催）：骨髄腫治療における抗体療法、**黒田 純也**（京都府立医科大学 血液・腫瘍科学 講師）、ホテルグランヴィア和歌山、2016.11.12 和歌山

**和歌山カイトロリス発売記念講演会**（小野薬品工業株式会社主催）：再発難治多発性骨髄腫に対するカイトロリス治療、**角南 一貴**（国立病院機構 岡山医療センター 血液内科 医長）、ダイワロイネットホテル和歌山、2016.12.1 和歌山

**Myeloma Conference**（セルジーン株式会社主催）：**三輪 哲義**（国立国際医療研究センター血液内科 血液疾患特任診療部長）、アバローム紀の国、2017.1.14 和歌山

**第 2 回血液・腫瘍塾**（中外製薬株式会社主催）：EB ウイルス関連 T/NK 細胞リンパ増殖症 (EBV-T/NK-LPD) の病態把握と診断および最新の基礎研究の紹介、**今留 謙一**（国立成育医療研究センター研究所 高度先進医療研究室 独立室長）、和歌山県立医科大学図書館棟研修室、2017.1.27 和歌山

**第 15 回和歌山造血細胞療法研究会**（アステラス製薬株式会社共催）：4 極構造を支える造血細胞移植コーディネーター (HCTC)、**酒井 紫緒**（千葉大学医学部附属病院輸血・細胞療法部 診療助教）、ホテルグランヴィア和歌山、2017.2.18 和歌山

**第 15 回和歌山造血細胞療法研究会**（アステラス製薬株式会社共催）：間葉系幹細胞を利用した GVHD 治療、**村田 誠**（名古屋大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学 准教授）、ホテルグランヴィア和歌山、2017.2.18 和歌山

**和歌山化学療法セミナー**（持田製薬株式会社主催）：造血幹細胞移植とハプロ免疫～バイオシミラーの使用も含めて～、**澤田 明久**（大阪府立母子保健総合医療センター血液・腫瘍科 副部長）、ホテルグランヴィア和歌山、2017.3.17 和歌山

## (7) 海外出張

該当なし

## 4 診療実績

|                              |        |
|------------------------------|--------|
| (1) 入院 患者総 (のべ) 数 (一時退院後を含む) | 336 名  |
| 退院 患者総 (のべ) 数 (一時退院を含む)      | 352 名  |
| (2) 外来                       |        |
| 患者総 (のべ) 数                   | 7932 名 |
| 内新規患者数                       | 301 名  |

入院患者疾病別分類 (入院のみ, 重複あり, 疑い症例を含む)

|                        |     |
|------------------------|-----|
| 1) 白血病                 |     |
| 急性骨髄性 (AML)            | 87  |
| 急性リンパ性 (ALL)           | 16  |
| 慢性リンパ性 (CLL, SLL, PLL) | 1   |
| 慢性骨髄性白血病 (CML)         | 7   |
| 2) 骨髄異形成症候群 (MDS)      | 13  |
| 3) リンパ性腫瘍              |     |
| 非ホジキンリンパ腫 (DLBCL 他)    | 111 |
| ホジキンリンパ腫 (HL)          | 10  |
| 成人 T 細胞白血病/リンパ腫        | 23  |
| 4) 形質細胞腫瘍              |     |
| 多発性骨髄腫 (MM)            | 37  |
| 5) 血球減少症 (造血不全含む)      |     |
| 再生不良性貧血 (AA)           | 6   |
| 発作性夜間ヘモグロビン尿症 (PNH)    | 1   |
| 汎血球減少症                 | 1   |
| 血小板減少症 (ITP 等)         | 5   |
| 6) 溶血疾患                |     |
| 自己免疫性溶血性貧血 (AITL)      | 5   |
| 寒冷凝集素症                 | 1   |
| 7) 骨髄増殖性疾患             |     |
| 好酸球増多症 (HPS)           | 2   |

|                        |         |
|------------------------|---------|
| 8) その他                 |         |
| 造血幹細胞移植ドナー入院           | 8       |
| 肺炎                     | 3       |
| 薬剤性肝炎                  | 1       |
| ランゲルハンス細胞肉腫            | 1       |
| 後天性血友病                 | 1       |
| <br>                   |         |
| (3) 造血幹細胞移植(2016.1~12) |         |
| 1) 自家移植                | 18      |
| 2) 血縁                  | 4       |
| 3) 非血縁                 | 23      |
| <br>                   |         |
| (4) 死亡                 | 21      |
| (5) 剖検 (率)             | 9 (42%) |

## 5 リーダーレポート

准教授 田村 志宣

2016年7月1日から血液内科准教授として赴任しました田村志宣です。2017年1月からは、医局長も兼務しております。前任地は、紀南病院血液腫瘍内科でした。異動に際し、そして、異動してからも、大勢の方々に大変ご迷惑おかけしております。

大学への異動の理由として、2018年度から開始する“新しい内科専門医制度”が大きな要因でした。医学部生の定員も100人となり、和歌山県に残る若い内科医が増えてきております。一方で、和歌山県の研修機関(拠点病院)に残る指導医は、減少する一方であり、指導医-初期・後期研修医の数の関係はアンバランスな状態となっています。この指導医不足の構図は暫く継続するため、指導を十分に受けることができない若い内科医が増えることが予想されます。以前より参加している若手の勉強会で、和歌山医大の医学部生・初期研修医の先生達が自分達の後期研修プログラムに不安を感じていることを耳にしておりました。和歌山県の内科医療を保つためにも、多くの内科医を輩出する基幹病院である和歌山医大に戻り、しばらくは若い先生の指導にあたることを決心しました。私自身、血液内科専門医・指導医だけでなく、総合内科専門医・呼吸器内科専門医も取得していますので、和歌山県の血液診療に加えて内科医療全般の底上げに少しでも貢献できればと考えております。

ただ、“新しい内科専門医制度”は2018年度からですが、すでに始まっています。2016年12月下旬に更新された初期研修医の専攻医の症例の取り扱いは下記の5項目でした。ご存知でしょうか？

- ① 日本内科学会指導医が直接指導をした症例であること。
- ② 主たる担当医師としての症例であること。
- ③ 直接指導を行った日本内科学会指導医が内科領域専門医としての経験症例とすることの承認が得られること。
- ④ 内科領域の専攻研修プログラムの統括責任者の承認が得られること。
- ⑤ 内科領域の専攻研修で必要とされる修了要件160症例のうち1/2に相当する80症例を上限とすること。病歴要約への適用も1/2に相当する14症例を上限とすること。

上記のとおり、平成29年4月の時点で初期研修2年目の先生達は、“新しい内科専門医制度”がすでに開始されています。このことを念頭に指導にあたることができるのは、教育熱心な園木教授・西川先生・蒸野先生と病棟医の先生達であり、初期研修医が“主たる担当医師”として診療にあたっている血液内科の研修体制に非常にマッチした内容だと思いました。今後、和歌山医大の中で内科研修できる有数の教室としてさらに盛りあげていきたいと考えており、私の一番の使命だと考えております。

実は、異動当初から慣れない電車通勤・大学生活でいろいろ悩むことが多かったのですが、昨年11月下旬に大変嬉しいことがありました。それは、田中顕先生(和歌山医大卒)、古家美昭先生(和歌山医大卒)、榎野祐一先生(自治医大卒)の3人の優秀な先生達の血液内科入局の申し出でした。医局員が増えることは、本当に嬉しく、同じ志を持つものが集まることは心強いことです。この“いい流れ”を来年度以降も繋がるように、“仲間”をもっと増やしていきたいです。

さて、大学の使命として、基礎・臨床研究を行うこともとても重要なことです。私自身、基礎研究に勤しんだ時期が6年間ありました。しかし、その後は、臨床一筋でしたので、10年以上もピペットマンを握っていませんでした。基礎研究のブランクも長いにも関わらず、異動後間もなくして、特定研究、及び科研費の申請を仰せつかり、少々戸惑いました。皮膚科金澤伸雄先生の御協力もあり、特定研究は採択され、幸いにも基礎研究を開始できるだけの最低限の研究費を得ることができました。日常臨床の中で、研究を行う時間は非常に限られています、若い先生達が少しでも基礎研究に興味を持って頂きたいと思っており、コツコツとネタ探しと研究室の設備整備をしております。私自身、久しぶりにピペットマンを握って、少しでもオリジナルの研究成果を出したいと思っておりますが、なかなか難しいです。若い先生達には、臨床だけでなく基礎研究の分野でも実績をあげている細井先生や村田先生の背中を追いかけて頑張ってもらえればと思います(私よりも学ぶべきものは多いです)。色々なことにチャレンジする精神は大事であり、その協力を惜しみませんので、申し出て頂ければ、幸いです。現時点では難しいですが、近い将来、血液内科医局員が結集し、和歌山医大血液内科の研究室から日本全国もしくは世界へ何か発信できることを祈念しております。

准教授・医局長として本当に至らないことばかりですが、今後とも皆様方の御協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

このレポート作成は、次世代シーケンサー研修目的の長崎大学人類遺伝学の移動中の“くろしお”と“のぞみ”の車内でした。ちょっと電車酔いしました・・・。



紀杏会後の若手だけでの打ち上げ（一人だけおじさんが含まれています）

## 2 足のわらじ

助教・病棟医長 西川 彰則

ついに今年は過去の年間同種移植件数を更新することとなりました。27件と月平均2件超となり、これは一重に医局員一人ひとりの努力の賜物です。件数が増えることにより、幹細胞提供施設や骨髄バンクとのやりとりなど煩雑を極めることとなりましたが、今年度からコーディネーターの上田さんが連絡業務や骨髄の受け取りまで担当していただくこととなり大変たすかっています。私の机の惨状からすると、上田さんがいなければこうもスムーズに調整業務が進まなかったと確信しています。

今年度は本当にいろいろな助けがあり、病棟運営することができたと感じています。4月から新入局員の弘井先生、堀先生が病棟医として大車輪の働きをしてくれ、また7月からは田村准教授が赴任してくれることになり病棟の層がっそう厚くなりました。1月末からは、準無菌室工事のため入院制限がかかる中、医局員皆さんの協力のおかげで5西から溢れながらも病棟運営ができていることは本当にありがたいことです。また、関連施設のろうさい病院阪口先生、海南医療センター小畑先生には、かなり無理な紹介や転院依頼にも応じて頂き、この場を借りてお礼申し上げます。

以上のような病棟運営の傍ら今年度は電子カルテシステム更新の一大プロジェクトを進めることを仰せつかったため、病棟業務が手薄になりご迷惑をかけました。なんとか正月に新システムの稼働を迎えることができホッとしております。

システム開発は、会社員時代にさかのぼり、もう20年近く前になりますが、今回のプロジェクトで当時のことを懐かしく思い出すきっかけになりました。当時はメーカー側の開発担当で、顧客と打ち合わせをしながら仕様検討を進めていくといったものでしたが、顧客の業務フローをどれだけ正確に把握できるかがみそでした。顧客業務を深く理解しなければ、同じシステムでもまったく使い勝手の悪いものができてしまうことは自明です。今回は、開発ではなく顧客側の立場で、システム設計と現場での運用を想定しながらいくつか新しい試みの機能を開発しました。輸血後感染症検査を促す機能、検査結果や病理結果など新着情報を表示する機能などです。リリース後も現場の使用方法との齟齬もあり、十分に機能するには言い難いものですが医療安全上重要な機能としてブラッシュアップしている最中です。忙しくもありますが、なかなか楽しいと思うのは、エンジニアの血が騒ぐのでしょうか。

医師になるまで回り道をしてきた自分としては、これまでの経験×医療という分野でも貢献できるということも一つのアイデンティティとして、今後も医局員の皆さんと協力しながらより良い医療を目指していければと気持ちを新たに今日この頃です。

私は 7 月に海南医療センターから大学に戻ってきました。海南医療センターでの勤務は 1 年間でしたが、高齢者の血液疾患患者に対する治療、一般内科的な治療、地域連携の重要性など、多くのことを学ぶことができました。海南医療センターでの治療中に、同院での対応が困難となって、大学の血液内科に転院をお願いしたこともありました。同種移植後の重症慢性 GVHD の患者、腫瘍崩壊症候群で透析が必要になる可能性のある患者、骨髄抑制期の敗血症性ショックで昇圧剤に反応しなかった患者などでした。中規模市中病院の医療資源では対応困難な患者を大学病院が必要に応じて受け入れてくれることは、他の市中病院で勤務する者にとっては安心材料になると改めて思いました。医大に戻ってからは外来医長を担当しておりますが、地域の開業医の先生や、市中病院の先生が血液疾患関連で困った症例に遭遇した際には、相談しやすい医療機関でありたいと思っています。

また一方で、大学病院にはベッド数などの制限もあります。特に今年は、紀南地域の患者様も当院で受け入れるようになったこと、準無菌室の改修工事のため使用可能ベッド数が一時的に減少していることにより、患者受け入れの難しい状態が続きました。当院での患者受け入れが難しい場合に、和歌山ろうさい病院や海南医療センターへ幾度となく受け入れをお願いし、いつも快く引き受けて頂きました。大変有難かったです。いずれの病院も 1 人で診療していますので、負担が大きかったであろうと想像します。私も 1 人で診療していた時には、診療時間を自由に使える半面、患者数の増加により時間に追われたり、休日も休みなく対応したりすることもありました。今後医局員が増加すれば、現在 1 人体制の病院も 2 人以上の体制にできれば診療がさらにやりやすくなると思っています。

最近の医局にとって大変喜ばしいことは、和歌山医大研修医出身の入局者が増加していることです。私が入局したときは、和歌山医大出身の入局者は 5 年ぶりでしたし、その後の入局者も 5 年あきました。本年度は 2 人（堀善和先生・弘井孝幸先生）、来年度は 3 人（田中顕先生・棚野祐一先生・古家美昭先生）と連続した入局者があり、病棟は活気づいています。これも、若い先生方が下の学年の先生や学生を丁寧な指導されているからだと思えます。今後の教室の勢いが楽しみです。

当科は若い医局員が多いため、臨床・研究での指導や医局内の取りまとめに上級の先生は大変苦勞されていると思います。園木孝志教授、田村志宣准教授、西川彰則先生にお礼を申し上げます。また、若い医師が多いにも関わらず、外来・病棟診療がスムーズに行えているのは、メディカルスタッフの協力があってこそだと思っています。今後も安定した血液疾患診療を提供していけるようにしたいです。外来に関しては、移植後フォローアップ外来を工夫していく必要があります。取り組んでいきたいと考えています。今後とも、御協力・御指導を宜しくお願い致します。



卒後 10 年目となった 2016 年は、高野山総合診療所での勤務を終え大学勤務となりました。昨年度の年報に「0 か 1 からのスタート、医師人生の第二章といった心境」と書きましたが、5 例の同種移植も担当し、町医者から血液内科医に戻ることができました。4 月からは弘井先生、堀先生が来て医局は大変賑やかになり、田村先生が来られ、さらに活気が生まれたと感じています。学生・研修医の中にも血液内科に興味を持ってくれる人が増えてきて、血液内科への追い風が吹いてきたと感じています。今後もその風を背中に受け、前に進んでいけるよう精進して参ります。

以下、今年を振り返って記載します。

#### 紀南病院血液内科外来について

4 月から毎週金曜日の外来を担当しました。患者数は 10 名弱で午後のみでスタートしましたが、1 年が経過し、20 名程度まで患者数が増えたので、9 時～15 時の外来としました。汎血球減少やリンパ節腫大など多数のコンサルトを受け、私自身も勉強になっています。R-CHOP 療法導入などは常勤の先生にお願いした後、外来化学療法へ移行する一方、白血病や自家移植は大学と連携し診療しています。来年度も紀南地方の血液内科診療を充実させていきたいと考えています。

#### 奈良県立医科大学輸血部出張

2016 年 11 月 14 日から 2 週間、松本雅則教授はじめ、諸先生方に大変お世話になりました。全国から TTP 症例の検体が集まっており、ADAMTS13 活性・インヒビター測定 of ELISA の他、von Willebrand 因子活性測定 of ELISA をご教示頂きました。同教室からは ASH に 2 演題出されており、ASH 直前の教室の雰囲気に触れ、和歌山からも ASH に演題が出せるような研究をしていかなければならないと感じました。診療面では、ADAMTS13 活性 ELISA により、当科でも TTP が迅速診断、血漿交換開始の早期決断ができるようになったのは大きな収穫となりました。

#### JMECC

日本内科学会による内科救急蘇生のコースですが、ディレクターである田村先生のご指導のもと、7 月にインストラクター認定を受けました。当院では年 2-3 回コースを開催していますが、アシスタント・受講生ともに血液内科の若手が積極的に参加しており、こういったところからも当科に興味を持つ研修医が増えることを期待し、今後も微力ながらコース運営に協力したいと思います。

#### 今後について

同種移植後合併症である血栓性微小血管障害に興味を持っています。血管内皮障害が主病態と考えられていますが、しばしば診断・治療に難渋します。今後は、血管内皮との関連が深い micro RNA に着目し、研究を進めていきたいと考えています。4 月からは田中先生、栩野先生、古家先生の 3 人が我々の仲間に入ってくれました。栩野先生は新宮市立医療センターに出向されますが、大学に戻ってくる 3 年後を目標に、一緒に研究を進められるよう基盤作りをし、発展させていきたいと考えています。リーダーレポートを書くにはまだまだ未熟ですが、若手を少しでも引っ張っていくことを誓って、今年のリーダーレポートとしたいと思います。

生まれてから四度目の年男を終え、また、高校卒業からそれまでと同じ 18 年の月日が流れた。一年という時間の流れは、年齢分の一の早さを感じるようになっていくとよく言われるが、それを年々実感している今日この頃である。スポーツ選手であれば、多くが引退していく年齢になり、今も活躍している同世代の選手を、自身を鼓舞するが如く応援してしまう。誰しも人生において最も輝けるピークが存在すると思うが、スポーツの世界では多くが 10 代から 20 代にピークを迎え、30 代で第一線を退くこととなる。昭和の大横綱千代の富士が「体力の限界」という言葉を残し、引退したのも今の自分より若い 35 歳であった。

一方、医師という職業においては、多くが 20 代半ばにようやく大学を卒業し、20 代後半で研修医を終え、そこから本当のスタートラインに立つ。私自身、医師として 10 年目を終えようとしているが、他方面では引退していく年齢に到った現在でも、何かを大成したわけでもなく、ピークにも到達していないと感じている。それ故、少なからず将来への不安を抱えつつ日々の職務に携わってきた。そのような中、昨年 7 月より大阪大学微生物病研究所に国内留学し、臨床業務から離れ、研究に没頭する日々を送っている。周りには一流の研究者ばかりであり、再び研修医もしくは学生に戻った気分で研究生生活が始まった。ここでは医師としての立場や経験は意味を持たず、一人の新米研究者として多くの人に支えられながら研鑽を積んでいる。最初は戸惑いばかりで、自分の研究知識や技術のなさを嘆く毎日であった。皆が当然の如くこなしていることができないのは、悔しくもあり、情けなくもあった。大学で助教として学生や後輩達の指導を続けているだけでは、こういった経験はできなかったであろう。また、必死に教を乞い、常に指導を受ける立場に再び身をおくことで、改めて研修医が日々感じている悩みやストレスも体験できていると思う。そういう意味でも浅はかな自負と傲慢さが露見してくる医師 10 年目にして、初心に帰り、自分を見つめ直す良い機会であったと考えている。

昨年の年報にも記載したが、私自身、今は医師として必要な研究技術を磨く期間と考えている。それは当然自分のためでもあるが、和医大血液内科の今後の発展のためでもある。幸運にも世界トップレベルの研究者である木下タロウ教授のもとで研究に邁進できる機会を与えていただいた。村上良子先生をはじめ、研究室の皆様にはいつも暖かくご指導をいただき、日々成長を実感できる充実した研究生活を送れている。今の自分を支えて下さっている研究室メンバー(通称:PIGS)、和医大血液内科メンバーにはこの文面をもって深く感謝の意を示したい。まだまだ一人前の研究者には程遠いが、この経験をいつか多くの方々に還元できるよう、この千里の地で一步ずつ前進していきたい。

今年で和歌山医大血液内科に来て6年目になりました。今年度一年間も、血液内科医局は激動の変化がある年であったと思います。田村先生や蒸野先生や細井先生が医局に戻って来て頂き、新たに弘井先生や堀先生といった新医局員が加わり、医局としての最大パワーが増したことは大きなものでした。一方で、自分が入局当時から大変お世話になっていた村田先生が国内留学に出られたこと、病棟の中心メンバーであった小畑先生が異動になられたことも、医局としては大きな穴であると感じました。寂しいことも多いですが、この一年間の医局を通して大学病院でのこういった人の移動は、地域医療充実や研究発展の過程として必要不可欠なものであり、また医局事態も新たな風を入れ変えることで活性化をはかるということも重要なことであると改めて感じるようになりました。

私自身のこととしましては、今年はこれまでの和歌山医大での積み重ねてきたモノ・経験を形にしていかなければならない節目の年でありました。今年は大学院生としての最後の年であり、研究成果や発表・学位取得といったことを目標にしていました。大学院生として、園木教授からは、直にご指導頂きました。園木教授自身も、臨床研修センター長など数多くの役職を兼ねて忙しくされている中、毎週水曜日（細井先生が戻ってこられるまではマンツーマンで）には必ず時間を決めて打ち合わせさせて頂き、自分の至らない部分を数えきれないほどご指導頂きました。第56回日本リンパ網内系学会総会で発表しました「ヒトB細胞性リンパ腫の染色体転座切断点に同定したmiR142の機能解析」では、学会奨励賞も頂くことができ、園木教授には深く感謝いたします。また、今後の研修制度などを踏まえると、私達が必ず通らないといけない、日本内科学会総合内科専門医・日本造血細胞移植学会認定医などの資格も本年度に取得できました。これらが可能であったことも、日々の臨床病棟業務が行えていることが前提であり、同じ職場で日々助けて頂いている医局員メンバー・医局秘書の皆様・コメディカルの皆様のおかげであると感じます。

大学院生活が終了となり、11月から助教と肩書きが変わり、徐々に病棟業務に戻るにつれ、以前とは病棟が異なる雰囲気であることも感じました。医師や看護師を含めたスタッフ全体の平均年齢も若年化しています。さらに、医師、薬剤師、看護師はもちろんですが、病棟助手、病棟外来クラーク、移植コーディネーター・医療事務など、多職種が積極的に集合することで、業務の充実性が以前よりはるかに上回るものでした。しかし、我々の職場は、難治性の疾患・患者さんに対して治療を行っている場でもあり、命と直接向き合っている場面も多くみられます。我々医療従事者はそういった患者さんに何かできうるのか、最善を探し続け、気を引き締めて臨まなければならないということも再認識しました。

私自身は来年度から和歌山医大を離れることが決まっています。今後は外部から、違った見方で和歌山医大血液内科を見守り、できうる限りの応援をさせて頂きたいと考えています。今後の医局と皆様のますますのご発展を心より祈念致します。

2016 年度をふり返って

輸血部 主任 松浪 美佐子

2017 年 1 月に第 4 期システムがスタートするということが決定していたため、それに向けて慌しく過ぎてしまった 1 年のような気がします。なぜか片付けてもすぐ積み重なっていつてしまう机の上の資料を整理しながら昨年度を振り返ってみたいと思います。

昨年度も前年度から変わらぬ 5 人のメンバーで仕事をスタートしましたが、その内 2 名が認定輸血検査技師の試験を受験することとなりました。この試験は学会参加等で点数を集め受験資格を得た後に、血液センターの見学や他の認定施設の実習、指定講習会等を受け、1 次筆記試験合格後、2 次筆記試験と実技試験に合格しなければなりません。仕事しながら勉強に費やす時間・体力が必要でなかなか大変なのですが、2 名とも 1 次試験合格まで達成することができました。引き続き今年度も受験するので、もう一息頑張っって認定取得してほしいと思っています。

2016 年 11 月には「不規則抗体カード」を導入することができました。不規則抗体は、一度同定されても力価が下がり、次に検査しても検出されないことがあります。また施設によっては規模や試薬の事情により、同定に時間がかかることがあります。患者さん自身が不規則抗体名を書いているカードを保有し受診施設に提示することで、安全な輸血医療を受けることができます。また、備考欄には移植情報を入れることとしました。県内の他病院の検査技師より、血液型のオモテ・ウラ検査が一致せず、どんどん精査をしていったのですが、結局わからず医師に確認すると血液型ミスマッチの移植患者さんが転院してきたのだという話を聞いたことがあります（はやく医師に確認すればよかったのという話ですが…）。そのため、不規則抗体を保有している患者さんだけでなく、血液型ミスマッチの患者さんにもカードを発行していますので（オレンジ色のカードです）、他病院を受診した際に提示して頂けるよう伝えてもらえると嬉しいです。

そして 1 月より無事に第 4 期システムが稼動しました。輸血部からは堀端がシステムのプロジェクチームの一員として、遅くまで会議に参加して頑張ってくれました。何より輸血部次長の西川先生のご協力もあり、システム稼動に伴い、「T&S」「アルブミンの輸血部管理」「輸血前後感染症検査実施の促進」の運用を開始することができました。これらすべては、輸血の安全性を高めるとともに、診療点数加算や病院の収益を上げるために必要な事です。他の大学病院ができていのに、自分たちができていないこともまだまだありますが、患者さんに安全な輸血を提供できるように少しずつ頑張っていけたらと思います。今年の夏以降には中央検査部とともに、輸血部門も ISO の認定審査を受ける予定です。審査には数多くの手順書作成が必要となります。また来年度よい報告ができるように 1 年間 5 名で力を合わせていきたいと思っています。

「桜咲く」春は別れと出会いの季節です。私は2年間、5階西病棟でお世話になりましたが、このたび異動となりました。今年1年を振り返ってみると、4月以降血液内科は病床利用率100%超えに始まり、新たに11階東病棟に8月から2床増床、12月からはさらに2床増床となりました。同時に病院経営の貢献に向けて、準無菌室改築のお話があり、血液内科患者数は増加する中で時期的に本当に工事へ踏み切ってよいのか検討したことを思い出します。しかし、今後の血液内科分野の発展、最新の医療、看護が提供できる状態としてハード面を整えることも重要であり、助教西川先生のベッドコントロールのおかげで2017年2月から4月にかけての3か月の工事がスタートできました。そして、准教授田村先生、助教蒸野先生が大学病院に戻られ、病棟看護スタッフにとっては安心して、いろんなことが相談できる体制を整えて頂いたと思います。また、病院からは血液内科の頑張りが認められ、医師、看護師共にインセンティブを頂くことができ、看護師が働きやすい環境を整えるために活用できました。今年度は、いろんな意味で5階西病棟が新たなステップに立つための準備期間でもあったように感じます。

今年度は新人4名、異動者4名を迎えることができました。同種造血幹細胞移植後のフォローアップ研修に1名参加、移植学会への参加、インターネット放送によるWebセミナーに参加し、知識を深めることができました。また、和歌山造血細胞療法研究会では「和歌山県立医科大学附属病院におけるLTFU外来の現状と課題」を発表することができました。今後は、病棟、外来における人材育成が重要な課題です。将来的には、血液内科外来の診療ブース、ベッドの確保、移植外来の構築も必要と考えます。

今後、「人」という花が少しずつ成長し、大きな花が咲くことを期待しています。そのためにも、大切な「人」という花を一緒に育てていってもらえることを願っています。また、私自身が「自分の人生において血液診療に関わったことはよい経験であった」と思えた2年間でした。みなさまには、さまざまなことでご協力、ご支援を頂き本当にありがとうございました。血液内科のますますのご発展をお祈り申し上げます。



「平成28年度新人看護職員臨床研修修了者」

今年度から5西病棟担当となり、さまざまな職種の方々にお世話になった一年でした。

私は、かれこれ・・・まあ、そこそこ長く薬剤管理指導業務をやっています。病棟業務というよりも患者さんへの対応だけで追われている時代からです。1内、2内、3内を掛け持ちで走り回っていた時代もあります。そのうち、診療科によって患者さんの性格になんとなく共通点があるのがわかるようになった覚えもあります。先生方に「指導依頼を出してください。」と営業もしていました。そんな昔の時代から、血液内科さんだけは、「つきあいが長いんよ。」と先輩方からずっと聞いていました。なので、薬剤部にとって少し特別な診療科のイメージがありました。

いろいろな病棟を担当して、服薬指導以外にもスタッフの質問や依頼応需も行ってきました。しかし、これほど、さまざまな職種の方々と本当に自然に医療チームであることを認識させてもらえる診療科は初めてでした。しかも、担当1年目なのに。一重にスタッフの皆様方の温かい受け入れのおかげだと感じます。本当に感謝しています。そしてこの姿が、来年度から開始予定である「病棟薬剤業務」のあるべき姿ではないのかと感じました。

来年度、薬剤部は「病棟薬剤業務」を開始します。これは、今までの「薬剤管理指導業務」が対患者個人についていた点数であったものに対し、対病院の入院患者に対する点数業務です。薬剤師がすべての病棟に配置され、「主に投薬前の患者に対する業務、医薬品の情報および管理に関する業務、医療スタッフとのコミュニケーション」で一定時間を満たしていることが条件となっています。

私は、5西病棟での薬剤管理指導業務以外に、この病棟薬剤業務を始めるための準備と4期システム導入の担当という2つの仕事も任されていました。ですから、病棟での業務には今までの担当薬剤師に比べて関われる時間がずいぶん少なかったと思います。時間に追われる中で、十分な知識を持たずに毎日活動せざるを得ないこと、みなさまにご迷惑をかけているのではないかと、患者さまに十分なことができていない、と大変心苦しい思いでいっぱいでした。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

少ないながらも培った知識を生かし、来年度からもみなさまのチームに入れていただき、今年度よりは充実した業務をできればうれしく思います。

今後ともよろしくご指導ご鞭撻をお願い申し上げますとともに、みなさまのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

## 6 寄稿文

当科のご報告

和歌山ろうさい病院 血液内科  
阪口 臨

当科は、谷村弘元病院長と中熊秀喜前教授のご尽力により、2006年1月に開設いただき、2016年に10周年を迎えました。ソフト面では、“血内ゼミ”と銘打ったスタッフ向け勉強会により、血液疾患に関する知識の整理を行い、ハード面では、玉置哲也前病院長のご高配により、新病院の南6階病棟に無菌室が2室完備され、病床定数が増え、さらに充実した医療を提供できるようになりました。これらにより、多忙さに拍車がかかり、関連部署のスタッフにはご迷惑ばかりおかけしてきましたが、そのおかげで、また、南條輝志男病院長のご英断により、2016年8月に、無菌室を1室増設していただきました。これにより、管理加算のいただける患者様で個室対応しか出来なかった状況が打破されました。

これからも、外来・病棟・化学療法センター・薬剤部・中央検査部はじめ各関連部署のすべてのスタッフと、貴医局のお力添えにより、当科を盛り上げていただき、患者様を含め皆さまのご期待にお応えできるよう、微力ながら頑張ってお参りますので、よろしくお願い致します。



## 2016 年度を振り返って

杏樹会 綿貫第2クリニック 内科  
綿貫 樹里

最近、特別な変化もなく過ごしている 2016 年度を振り返ってみたいと思います。

2016 年 5 月 内科診察の診療の場が綿貫整形外科から綿貫第 2 クリニックに引っ越ししました。患者さんたちは、それまでと施設が異なるので戸惑うことがありましたが、診療上は大きなトラブルなく引っ越し終了でき一安心しました。

今年度は、当院外来では血液疾患は、真性多血症 1 名と MDS1 名、悪性リンパ腫（化学療法後経過観察中）1 名で急を要する状態もなく経過中です。その他、外来患者はいろいろ増えていますが・・・。

週 1 回木曜日お邪魔している研究室では、ようやく qPCR できるようになったかな。と思えるようになりました。マウス達も細々と継代されていてよいのかどうか皆元気です。これまで、主人を待っているかのようなようだった実験台も、研究される先生方が徐々に増えて、今ではそこに主人がいなくても“休憩中”と言っているかのようなようです。昨年度と変わらず一人で実験室にいるのに不思議な感じですが、実験器具それぞれがうれしそうに感じます。わたしもうれしいです。

今まで動いているところを見たことなかった研究機器が活躍していたりして何と云いましょうか、春の雪解けを見ているようです。

2 月の同門会も早 3 回目を迎え、今回は医局員の先生方のご活躍を発表していただき、同門会も日々成長してゆくのだなあと感じました。入局してくれる先生もいてくれて春だなあと感じました。

結果としまして、2016 年度は、私にとって大きな変化はありませんでしたが、のどかな春を迎えたようなうれしいのたくさんあった年でした。2017 年度はどうかなあ（ちなみに新年のおみくじは「凶」でした。）、しっかり書けるようにメモしておこうと毎回このレポートを書きながら思います。



医師になり 5 年目、血液内科に入局して 3 年目の私に海南医療センター(通称 KIC)への異動が命じられたのは、2016 年 4 月頃でした。KIC は、2014 年 7 月より血液内科の常勤ができて以来、栗山幸大先生・細井裕樹先生が 1 年交代で勤務されていました。お二人とも、血液内科専門医の資格を持ち、臨床経験も十分に積まれており、私も研修医時代や入局後もお世話になっている大先輩です。その後釜に、外来経験すらない若輩者の私で務まるだろうかと不安を抱くとともに、知り合いの先生や同期がいない新天地で、どこまでできるものか試してみたいという気持ちもあり、そして任せて頂いたからには、血内医局員の名に恥じぬよう精一杯やり遂げようと心に決め、2016 年 7 月より KIC に赴任しました。

全病床数 150 床のうち、血液疾患の入院患者様は常時 10-15 人程度で、また、新患外来や救急当直中に入院となった患者様も受け持つため、20 人を超えることもしばしばあります。患者平均年齢は 80 歳と高齢で、100 歳を超えることも珍しくはありません。血液疾患の内訳としては、再発難治の DLBCL が 6 割と多く、合併症や Performance status に応じて、R-THPCOP 療法や R-DeVIC 療法などの救援療法を行っています。大学病院と連携し、化学療法継続目的に紹介して頂くことが多いですが、それ以外にも、近隣の開業医の先生から血球数異常を主訴とした紹介も増えてきています。また、院内紹介もしばしばあり、そのなかには初発の急性前骨髄球性白血病の患者様もおり、診断後速やかに当院にて寛解導入療法を施行し、現在は地固め療法を行っています。

血液疾患以外の内科疾患では、肺炎・尿路感染・脳梗塞・心不全など common disease が多く、インフルエンザ筋炎や横紋筋融解症、ANCA 関連血管炎など稀な疾患も経験させていただきます。もともと総合診療にも興味があったため、忙しいなかでも、大変得るものの多い充実した日々を過ごしています。また看護師や薬剤師、検査技師・PT・OT・外来クラークなどコメディカルの方々も非常に協力的で、多忙な業務でも、それほど、苦にはならず、診療に専念できる素晴らしい環境だと感じています。

異動してからは、大学病院と市中病院の違いを日々肌で感じる事が多く、医師が一人でできることには限りがあり、“チーム医療”の重要性を再確認しました。また患者様は、大学病院では経験しないような、おそらく外来の段階で他院に紹介しているであろう、高齢・治療抵抗性血液腫瘍を診る機会が多くなりました。そのため、治療目標は治癒でなく、いかに穏やかな時間を自宅で長く過ごしていただけるか、と考えるようになり、症状緩和の重要性を実感するとともに、今の医療の限界・自分の限界を日々痛感しています。KIC での経験を糧とし、自分の将来像を模索しながら、日々を大事に過ごし、全人的な医療が実践できるようこれからも精進致します。これからも変わらぬご支援よろしくお申し上げます。